

F-5 ジャワ社会とジャワ人

628. ジャワ社会の構成

クリフォード・ギアツ(C.Geertz)はハーバード大学の文化人類学者の調査チームを引き連れ 1952-54 年のジャワ島の社会調査を行い、ジャワ社会の構成を次の3グループの社会集団、即ち、①農民層、②商人層、③官吏層に分け、各グループの宗教への態度を分析に基づき『ジャワの宗教』という書を発表した。実際の調査地は東部ジャワ州のパレ(Pare)市であるが、論文ではモジョクト(Modjokuto)という仮名になっている。後にギアツはバリ島の調査も行い『劇場国家(→978)』の著作もある。

『ジャワの宗教』の要点は次のとおりで、彼の説は大きな波紋を投げかけた。

◎プリヤイ(Priyayi)というヌグリ(→629)が基盤の官吏層とヒンドゥー的教養

◎サントリ(Santri)というパサール(→864)が基盤の商人層と敬虔イスラム教
サントリは都市サントリと農村サントリの2区分になる

◎アバンガン(Abangan)というデサ(→591)が基盤の農民層とアニミズム



階層社会においては特定の階層が特定の宗教と繋がることにヒントを得て日本の場合を私なりに考察してみた。日本の江戸時代の士農工商ではプリヤイに対応する武士階級の精神バックグラウンドは中国の儒教である。サントリに対応する工商は仏教に帰依している。農民の崇めるのはお天道様であり日本神道はアニミズムの純粋培養であろう。

本題のジャワ人に戻るとイスラム教 or 非イスラム教という宗教との組み合わせに社会層を①インテリゲンチヤ、②読書人、③町の大衆、④

村のエリート、⑤農村大衆の5区分にすることによりジャワ社会は 10 の社会集団から構成されるとした。

社会層が異なると宗教への態度も異なり別民族のようである。アバンガンのほとんどは表向きはイスラム教徒であるが、多くは KTP イスラム教徒¹といわれるように名目上のイスラム教徒にすぎない。サントリのイスラム教に対し、プリヤイとアバンガンは非イスラムのジャワ主義で連合しサントリに対立する構造になる。

ギアツは社会集団と政党への帰属意識をも調査してそこに見られる傾向をアリラン(aliran)と名づけた。ジャワ伝統社会は植民地支配によって^{たが}権が緩み、ナショナリズム思想に基づく政党思想によって新しい集団が編成された。アリランとは新しい様式の統合への“流れ”のことである。

スカルノ時代の政治構造はプリヤイとアバンガンはインドネシア国民党(→293)とインドネシア共産党(→381)を支え、サントリはマシュミと NU のイスラム政党(→419)を支えた。

スハルト体制下では脱政党が強権でもって政治活動はゴルカル(→393)に収斂されたが、スハルト退陣後の政党の自由化により新たな再編成がおこなわれている。

¹ KTPはインドネシア人が必携を義務付けられている身分証明書である。本人の記載事項に宗教の欄があり空白は許されない。人口比でいえばアバンガンは絶対多数でありジャワ人の 3/4 を占める。サントリとアバンガンは社会階層をなしており、その関係はサントリが上位である。アバンガンの子女がサントリの子女と結婚することはアバンガンにとって誇りである。

629. プリヤイ層

少し古い本であるが朝鮮の支配階級の“両班”について述べた『オンドル夜話(中公新書)』を読み、隣国にありながら日本の武士とは異なる不思議な社会階層の存在を知った。ジャワのプリヤイについて調べると両班との共通点が多いようである。両者とも“文”の尊重ということで日本の武士階級とはやや異なる。



プリヤイの語源は「王の弟」という意味でジャワ宮廷の貴族層である。スルタン・アグン(→337)時代までは武人であった支配層、国を挙げて外敵と戦う戦争がなくなりプリヤイは貴族化した。継承をめぐる内乱は頻繁に起きて宮廷の権力闘争の延長であった。

ジャワの支配層にとってはソロ(→130)やジョグジャカルタ(→120)の王宮が世界の中心であり、そこが「ヌグリ(negeri)」であった。ヌグリには「王都」の意味がある。そうでない世界の一つはパシシル(→136)という海岸地帯であり、もう一つはヌグリの外縁部であった。パシシルはサントリの地域であり、ヌグリの外縁部はアバンガンの地域である。ヌグリに帰属するのがプリヤイである。

プリヤイという用語そのものには宗教的な意味はなく身分的な社会階層である。プリヤイはジャワの洗練された文化の担い手であり、エリート意識から他を差別する精神構造の持ち主である。このような意味で“土農工商”が生きている。

アメリカの文化人類学者ギアツのジャワ社会を宗教との関連から分析した「ジャワの宗教」においてプリヤイはサントリ、アバンガンと対比される文化類型の一つとして、その文化的素養はインドのヒンドゥー哲学にあることを指摘した。

オランダによる植民地体制の確立によってプリヤイは王宮貴族から行政官僚に転じた。オランダは県知事のブパティ(Bupati)、同補佐のパティ(Patih)以下のジャワ人の官僚組織を利用する間接統治によってジャワ支配を行った。

オランダの植民地支配の反省から倫理主義(→283)に基づいて設立された医学校、師範学校の入学者はプリヤイの子弟であり、卒業者は新しいプリヤイになった。こうしてプリヤイとは西欧式教育を身につけた知識人をも総称する意味になる。

プリヤイは植民地体制派ばかりではない。今世紀初頭より高揚してきたインドネシア民族意識の担い手もまたプリヤイであった。インドネシア初代のスカルノ大統領も最高学府を出たプリヤイである。インドネシアの大学で最も優秀な学生は公務員になる。役人は「パモン・プラジャ」という。無知なる者たちの面倒を見る人の意味である。高級公務員はプリヤイの伝統を引き継いでいる。

現代インドネシア文学を代表するウマル・カヤムは1992年に『プリヤイたち』という小説を発表した。植民地時代から今日までジャワ知識人一家三代の人間模様である。そこに描かれたプリヤイとは職業、あるいは家系とか血統ではない。貧しい人々に思いやりのある高貴な精神の持ち主こそプリヤイであると紹介されている。残念ながらこの小説はまだ翻訳されていない。

630. サントリ層

イスラム教がジャワ島に最初に到来し受け入れられたのはパシシルというジャワ海沿岸の商業都市であり、ワリ・ソング(→712)はこれらの町を拠点としてイスラム教を布教した。ジャワにおけるイスラム教とは都市の宗教、商人の宗教であった。



パシシル(→136/7)の都会の古いモスクの周辺には「カウマン(Kauman)」といわれる塀で囲まれた一角がある。金曜日の集団礼拝を行う 40 人の成人男子をモスクの側に住ませたのがカウマンの起源である。「サントリ(santri)」といわれる敬虔なイスラム教徒はカウマンに住むことに何よりの安らぎを覚える。

イスラム信仰を深めるためアラビア語のコーランを学習するプサントレン(→733)というイスラム塾がある。サントリの語源はプサントレンで学ぶ者を指したが、今日では熱心なイスラム教徒を意味する。

名目のイスラム教徒であるアバンガンに対する真摯なイスラム教徒のサントリはイスラムの厳しい戒律に対して自己規制を行っており、彼らは勤勉に働き、金を貯めてメッカ巡礼に行くことを信条としている。

スラムはジャワ農村にも浸透し、富裕な農民層ほど敬虔なムスリムとしてサントリと同じ価値観を持つようになり、20 世紀に入って「農村サントリ」という集団の存在が認識されるようになった。農村サントリは都市サントリより保守的であり因習を重んじる。

インドネシアのイスラム教徒の保守的とはコーランを翻訳してはならない定めを墨守し、意味は分からずともコーランをアラビア語で唱え、教義についてはキヤイに全人格的に従うことである。スハルト体制崩壊後の選挙で大統領になったワヒド(→411)は東部ジャワのモジョケルトの出身であり、中部ジャワ、東部ジャワの農村サントリの政党である NU(→419)の支持母体である。

一方、イスラム改革運動としてオランダ植民地時代の 1912 年にジョグジャカルタにムハマディア(→419)が設立された。ムハマディアのモスクではインドネシア語の説教が導入された。コーランのインドネシア語を認め、コーランに記載されていることを理解することがコーランに戻ることであり、とするのが改革派イスラムである。

改革派は「サントリ・モデルン(現代的サントリ)」といわれ、都市サントリが支持基盤である。イスラム改革運動を推進し、宗教的施設のみならず診療所、孤児院など福祉施設を設立、経営し成果をあげてきた。

ムハマディアの組織は汎インドネシア・イスラム運動としてジャワ島のみならず外島にも拡がり、外島のイスラム教徒の政党となっている。PAN(→408)が今日のムハマディアの流れをくむ政党である。

新しいイスラム運動を基盤にした福祉正義党(→425)という新政党が登場し、サントリとイスラムの関係も多岐多様化してきた。

631. アバンガン層

アバンガン(abangan)の語源は「赤」を意味する。敬虔なイスラム教徒は白い衣を纏うことからプティハン(putihan)と呼ばれるので「白」の対立としての「赤」である。スカルノ時代の末期に躍進した共産党の基盤の

ジャワ農民は名目上のイスラム教徒であってそれほど敬虔でない集団はアバンガン層といわれる。「赤」は共産党はシンボルカラーである。

ジャワ農民に伝えられている訓話にパー・シデェン(Pah-Siden)の物語²がある。その骨子を紹介したい。貧しい農夫パー・シデェンはつきのない男で幸運から見放されていた。一生懸命働いても生活はよくなるので、妻は夫にぐちり、なじった。そこでやけくそになった農夫は海岸に行き、女神ロロ・キドゥル(→949)配下のキャイ・ブロロング(KjaiBelorong)に会う。キャイ・ブロロングは金銭の女神であり、頼めばろくなことがないと敬遠されている。しかしパー・シデェンはあえてキャイ・ブロロングに助けを求め、金を得るために魂を売ることを約束した。

パー・シデェンはキャイ・ブロロングと契った。それからというものは金持ちになり若い娘と結婚した。金がなくなればキャイ・ブロロングを呼んで寝ればよかった。

ついにキャイ・ブロロングが自分の宮殿の柱にするためにパー・シデェンを連れていくと言ったとき、たくましい農夫の青年を身代わりに連れていかせた。10年目にまたキャイ・ブロロングが連れていくといった時はかわりに弟を差し出した。次の10年目には息子を差し出す。最後にどうしても免れない10年目がやってきた。パー・シデェンは炉の石となって焼き続けられる。これが貪欲^{どんよく}への報いであるという説諭である。

日本人ならばドンファンでなくてもそれほど悪い話ではないと思う。炉の石ならば暖かいであろう。しかし、この話はジャワ農民に対する欲深さに対する戒めとなっているのは、最後の永遠に焼き続けられる罰に大いに意味がある。

イスラム教徒にとって火で焼かれることは地獄であり、その地獄が永劫に続くことである。アバンガンの農民は地獄の業火を恐れるくらいはイスラム教を敬っているが、それ以上のものではない。

ムスリムの戒律である日々のお祈りもやらない。イスラム教徒に禁じられているヤシ酒も飲むし、豚も気がつかない振りをして食べる。

私の住居の近くで夏休みに入ると朝 6 時頃からラジオ体操が始まり、かなり喧しいので夏休み間は大変なことだと心配するが幸いにして 1 週間で終わる。夏休み終了前 1 週間になるとまた早朝のラジオ体操が始まる。多分、作文には『夏休みは朝ラジオ体操に行きました』と書いているのだろう。アバンガンの断食とそっくりである。

彼らは KTP(身分証明書上の)イスラムといわれる。アバンガンの信条にスダヤ・アガミ・サミ・クマオンという言葉がある。「どんな宗教でもみな同じ」という意味である。

インドネシアに 30 有余年、君臨したスハルト大統領は典型的なアバンガンの生まれであるが、階層を上がりつめたがアバンガンの体臭は消えなかった。

632. ジャワ人の性格

「ウォン・ジョウオ(wong Jawa)」はジャワ語で「ジャワ人」の意味である。この言葉にジャワ人は言い知れない誇りを持つ。その自信は歴史と文化に支えられ、次の三つの信条となっている。

第一に「静寂主義」であり、急ぐことを快く思わない。緩慢な行動は暑いせいばかりではなく「一所懸命働く

² Augusta de Wit 「JAVA Facts and Fancies」

な、早く老けるぞ」という信念に基づくものである。変わったことをすることを恐れる。人生を危うくするものとして5のM (mabuk 酔う、madat アヘンを吸う、madon 女、main 博打、mangan 食べる)が注意喚起されている。

今田述著『トワン、ガンバルか?』(中公新書)によるインドネシア人の人間評価基準は、①働いて金にならない人、②働いて金になる人、③働かなくて金にならない人、④働かなくて金になる人、という①②③と順番によくなり、④が最も賢い(pintar)と思っている。

彼らから見れば日本人は②の段階である。インドネシアで忙しい人はあまり尊敬されない。ビジネスは中国人と日本人にでもやらしておけばよいと考え、働かなくて金になることをあこがれ、働かないことの自己弁護にしている。インドネシア人のこととしているが、ジャワ人と置き換えてもよいだろう。

第二に「運命論者」である。ジャワ人は自分自身の行動には限界があると意識している。イスラム教のインシャラー(→821)の影響もあるだろう。彼らの特質を表す言葉は、①「ナリモ」あきらめの態度、不愉快なことも運命としてうけいれる。②「サバル」忍耐の態度、時期の到来を待つ。従って鋭い議論より和解による解決を好む。③「エリン」ものごとを深く考え、行動を控えめに目立たないようにする。意見は述べないが不平はいう。「歩く時は上を見ないで下を向いた方がよい」というのはジャワの諺である。

第三に幸福と調和を大事にする「平和主義的」な考え方である。外面と内面の融和の考え方にはインドから受容されたラサ(rasa)が根源にある。内面的安定を得るためにクバティナン(→707)にのめりこむ。

ジャワ人をよく知るオランダ人は彼等を「Hetzachtstevolkteraarde」と呼んだ。オランダ語で「世界で最も優しい民族」という意味である。ジャワ人を表すキーワードは Tanggapsasmito (他者の意思を慮ること)、Teposliro (他者の感情を慮り自分の行為を自粛すること)である。ジャワ人は相手の意思を確認しながら行動し、単独行動をいやがる。

最初にジャワ人に接したヨーロッパ人は「かれら信じがたいほど偽善的で、(心の中の)悪をうわべの善でおおいかくす。かれらは決断を下す際にも意志が変わりやすく、また時間がかかる。かれらは非常に誇り高く、傲慢で野心的である。もっとも重要な美点はかれらが友情にあつく、態度が丁寧なことである。彼らの間には、程度を問わず相手をののしる言葉がない」と記している。300年前のファン・フーンズ著「ジャワ旅行記」(大航海時代叢書 II-2)の記述であるが、ジャワ人は昔からジャワ人である。

633. ジャワ語の階級性

インドネシアの国語はインドネシア語であるが、インドネシアで最もよく使われる言葉はジャワ語である。何故ならインドネシアの人口の半分以上はジャワ人で、ジャワ人の日常用語はジャワ語であるからである。

ジャワ語もインドネシア語と同じオーストロネシア語族に属し言語体系は同じであるが、ジャワ語は世界でも特異な言語として知られるのは“敬語”の所以である。敬語だけが異常進化した言語であり、その方面ではかなり有名な日本語も敬語にかけてはジャワ語には足元に屈しざるをえない。

ジャワ語は次のように大別される。①ンゴロ(Ngoro)は友人同士か目下の者へ、②クロモ(Kramo)は年長者か目上の者へ、③クロモ・インギル(KramoHinggil)は特定の高位者に対する言葉である。

①②③の各々の言語では二人称三人称の呼称を初め、単語さえも異なることがジャワ語の特徴である。さらに細分すると④マディヤ(Madya)はンゴロとクロモを適宜配分した混合語、⑤「クロモンデソ」は丁寧な田舎

言葉、⑥ボソ・クラトン(BasaKedhaton)は王宮で使用される特殊貴族言葉である。

このような複雑なジャワ語を正しく使うためには語学能力もさることながら相手の社会的地位を素早く嗅ぎわける直感力を伴わなければならない。そうでないと正しいジャワ語が話せないからである。

染谷臣道著『アールスとカサル』によれば、敬語は静かな声で抑制をきかせた低く重い荘厳な声でゆっくりと話され、短調のような陰翳^{いんえい}がある。語彙は例えば「鉄」であれば、「硬いもの」というような婉曲^{えんきよく}的表現や比喩^{ひよ}的表現、あるいはサンスクリット語やアラビア語からの借用語が多い。敬語で語りかける者の物腰や眼差しは自ずと控えめになり恭順の意を示すものとなる。

複雑な言語も使い慣れると言外に微妙なニュアンスの表現も可能になる。何れにしろ、ジャワ語の習得はジャワ社会にどっぷり漬かった者でないと至難の技である。

ジャワ人は伝統芸術の影絵芝居のワヤン(→904)を通じてジャワ語の敬語体系を学んできた。ジャワ語の特質は〈語り言葉〉であって〈書き言葉〉でないことである。このためインドネシア文学の成立においてもジャワ語の入る余地はなかったのであろう。

インドネシアでジャワ人が圧倒的多数であるにもかかわらず、ジャワ語が国語にならなかったのはジャワ語の非民主性の故である。ジャワでも学校教育の成果でインドネシア語は普及している。この場合であってもクジャウェン(→119)で上位者に話されるインドネシア語は優雅に聞こえるらしい。

近代社会としてのインドネシア社会が発展する過程で、ジャワ語はその他多くの民族の言語と同じ地方語の位置づけである。しかしながらインドネシア語自身がジャワ語の影響を受けて乱れてきているという指摘³がある。

634. ハルスとカサル

ジャワ人はいつも微笑みをたたえ穏やかにゆっくりと話す。悪い話は聞かせない。人にあう時は控えめな姿勢で軽く手に触れるだけの握手をする。人前で足を組むことはない。腕組や腰に手をやること⁴も攻撃的意図を表す姿勢と見なしている。

贈り物は人がいないところで「つまらないものです」と謙遜して渡す。送ることによって相手に恩きせがましくしてはならない。もらう方はその場で直ちに開けるようなことはしない。贈り物を見て喜ぶのははしたない行為である。御礼も簡単に言った方がよい。くどい御礼はさらなる贈り物を催促することに通じる。とにかくバサバシ(basabasi=社交辞令)がわずらわしい。

ジャワ人は文化の域までに洗練されている物腰がある。これを《ハルス(halus)=上品》という。ハルスの反対は《カサル(kasar)=粗野》である。両者はジャワ社会のキーワードである。

このハルスはインドネシア人の中でジャワ人が最も際だつところである。ジャワのハルスの中心は文化地理概念としてはクジャウェン(→119)といわれる中部ジャワであり、社会階層としてハルスを支えるのはプリアイである。ハルスを最もよく表現する言葉は敬語の塊のようなジャワ語のクロモである。

ジャワ世界はヌグリ(→629)といわれる核があり、そこにはハルスであるクラトン(→121)がある。ヌグリをとりまく

³ インドネシア語では目的語をとる他動詞は接頭語に「me」、接尾語に「kan」をつける。ジャワ人はジャワ語の慣習から「kan」を「ken」と発音する。ジャワ人以外もジャワ人を真似て「ken」が多用されている。白石隆著「インドネシアから考える」

⁴ 独立記念式典でインドネシアの国旗掲揚中に腰に手をやっていた日本人が国家不敬罪で検察庁から呼び出しを受けたことがある。久保田雅夫著「キラキラ・インドネシア」

周辺はカサルである農村部から成り立つ。

ハルスであるジャワ人と対照的な民族とされるバタック人(→607)はカサルの代表である。ジャワ人からカサルとされる外島人(→019)はジャワ人を「ソンボン(sombong)」と思っている。横柄、慇懃無礼^{いんぎんぶれい}という意味である。

同じインドネシア人でもジャワ人とバタック人は異なる。ましてその他にも多くの民族がいる。「インドネシア人の民族性は？」という質問があってもその答えは「分からない」である。何故ならインドネシアは多民族国家で、各々の民族は文化、伝統、言語、宗教、習慣を異にしており、その多様な民族をまとめて民族性をさす適切な表現は「多様である」というより他にない。

しかしジャワ人はインドネシア人の大半を占めており、インドネシアを代表する民族である。他の民族は各々の個性と独自性を維持しながらも、一方では人口の多いジャワ人の民族性に収斂されていくことも否定しえない。いわばジャワ人を中心としたインドネシアの国民性が形成されつつあるともいえよう。

日本が第二次世界大戦中にインドネシアを占領した際に初め日本軍は解放軍として歓迎されたが、次第に日本軍の“カサル”が明らかになり軽蔑されるようになった。木曾義仲が京都に攻め入り平家を放逐したが、やがて大宮人から粗野として軽蔑され、政権は1年しか持たなかった。ジャワ占領の日本軍は木曾義仲軍と同じであった。

635. ジャワ人の生活哲学

ジャワでは子供のことを「ドルング・ジャワ(「ジャワ人でない」の意味)」という。一人前の大人ならば「サンブン・ジャワ(既にジャワ人の意味)」であってジャワの掟^{おきて}に従わねばならない。子供の教育はジャワ人らしくなることが求められる。粗野な子供にはウォン・ジョウォ(ジャワ人)らしくなれと説教する。

アリフィン・ベイ著の『インドネシアのこころ』においてジャワ人の生活哲学としてボノカムシ・ディポヨノの論文から引用している8項目を孫引きして具体的事例を同書の記載^{おえん}に敷衍して説明することとした。

①受入(narimo):何かよくない事がおきても自分の所為^{せゐ}でも他人の所為でもない。何事も運命としてあきらめる自制力が求められる。ジャワ人は自分の子供が死んだことをニッコリ笑って報告する。大袈裟^{おおげさ}に嘆くことはむしろ見苦しいと考えているからである。これはジャカルタの外国企業の西欧人の上司が経験するカルチャーショックである。

②忍耐(sabar):ジャワ人は過激な行動をしたり、性急な要求はしない。彼らは忍耐強くがまんしている。時間がきて問題が自動的に解決されるのを期待する。サンダン・パンガン(Sandangpangan=基本的に必需品が満たされている状態)の現状が変わることを恐れる。良い意味では楽観的であるが、悪い意味では怠け者である。

③警戒(waspodo):知らない人に自分の方から近づくことはない。言い換えると人見知りをする。人が集まった時も注目されないようにふるまう。内気であり、はにかみでもあるが、余計なことにかかわりあいたくないという警戒心の表われであろう。

④判断力(eling):初対面の場合は相手の地位を肌で判断しなければならない。ジャワ語では相手の地位で言葉を使い分けねばならないからである。意味深長な発言から信号を読み取る能力も求められる。この種の能力が磨かれすぎることが、インドネシアに多い汚職の原因かもしれない。偉い人が「妻の誕生日だ」とい

えば『お祝いを持って来い』という意味であることを察しなければならない。上役が何を言っても返事⁵は「インギー(ごもつとも)」である。

⑤礼儀作法(totokromo):(次項)に記述。

⑥威厳(kaprajan):一かどの人物は細かいことにこだわらない。数字などはキラキラ(→581)でよい。偉い人が契約書の文言の細かなことを言ったり、公共の場で激論したりすることははしたないことで威厳が損なわれる。

⑦簡素(andasor):人目を引くような派手な恰好はしない。ちなみにバティック・シャツ(→782)は日本で着用すれば目立つがインドネシアでは地味な服装である。

⑧謙遜(prasojo):自分のことは総て控えめである。従って自己主張の強いことは嫌われる。集まりに出席しても出しゃばってはならない、後ろから座席が詰まっていくのは日本の講演会でも馴染みのある風景である。

636. ジャワの礼儀作法

正しくジャワ語が話せることはジャワの礼儀作法の第一である。そのほか礼儀作法は態度、姿勢、表情、発言の仕方などすべてにわたっており、まさにジャワ文化は礼儀作法の文化である。礼儀をわきまえないことは無礼(kurangajar)として忌避される。

例えば召使がトゥアン(主人)に物を渡す時は頭の位置を主人より低くして左手を右手に軽く添える、というような動作は現在も生きている。

ジャワの礼儀作法では身分の低い者は偉い人の前で立って歩いてはならない。従ってしゃがんだままの歩き方で膝行⁶する。映画で見るとは、日本の体育クラブの練習で見かける“アヒル歩き”である。

貴族社会では子供に対しても父親の前では膝行が求められた。プラムディヤ・アナンタ・トゥール著の大河小説『人間の大地(→975)』では西欧教育を受け遊学から帰省した主人公が貴族の父親に対して膝行を余儀なくされた屈辱を自我の目覚めとしている。しかし近代社会の発展とともに膝行は廃れて見かけることなくなった。

シーボルトはバタビアを経由して日本へ来た。そのシーボルトが江戸城で将軍に“お目見え”の時は、時代劇映画で馴染みの礼儀作法を強制されなくても目撃したはずである。シーボルト日記にはジャワのクラトン(→121)と江戸城の礼儀作法の比較のコメントがありそうでないのはどういう事情であろうか。

現在でも主人と召使の関係は毅然としている。彼ら同志の会話のジャワ語を理解できなくても話し方、態度からどちらが主人でどちらが召使かを見誤ることはありえない。事務所の上司と部下の関係も同様である。

召使が主人にものを渡す時は下から差し出さなければならないので、茶もこのようにして注ぐ。仮に主人が寝転がったまま茶を所望した場合に下から茶を注ごうとするとアクロバットのようになりまさに漫画である。

外国人も主人である限りジャワ人の召使に礼儀作法をしつける社会的責任がある。ところがジャカルタの高級住宅街では日本人駐在員宅で勤めた女中は評判がよろしくない。これは礼儀作法の教育がなっていない

⁵ 「インギー・インギーオラ・ク・パンギー」という返事である。

⁶ 膝行(しつこう)は「広辞苑」などの日本語の辞書には記されていない。漢和辞典に記載されている膝行は時代劇で将軍へのお目通りの際に「前へ」と言われ座ったまま膝で擦り寄りのことであろう。映画「カルティニ」で見たジャワの膝行はアヒル歩きであった。

いからである。一昔前まで日本人も礼儀の正しい国民といわれたものであるが、今では家の中の躰^{しつけ}もできなくなった。その点ジャワ人は今でも礼儀正しい民族である。

ジャワ人にとってインドネシア独立とはジャワのハルス(前々項)が外島のカサルに屈する一種の社会革命でもあった。封建主義に連なるような慣習は西欧風合理主義に押されて姿をひそめた。しかし称号(次項)などのように堅持されているものもある。

ジャワはインドネシアに吸収解消されたという側面もあれば、ジャワがインドネシアに拡大発展した側面もある。ジャワの礼儀作法はこの両面から見た場合どのように評価すべきだろうか。

637. 称号・封建制の遺物

インドネシア独立は一種の民主制を伴う社会革命でもあった。王制の廃止、身分制度の廃止などの民主主義を意図する民族主義者の思想は人の呼び名にも反映し、初代大統領になったスカルノは民衆から親しみをこめて「ブン・カルノ(BungKarno)」といわれた。日本語では「同志カルノ」と訳されている。シャプリル(→444)はブン・クチル(BungKecil)で“kecil”は“小さい”という意味である。シャプリルは小柄であった。

しかし独立後、時間が経過すると次第にクラトン(王宮)の封建制の遺物が復活してきた。スカルノ大統領自身が母の家柄から貴族の伝統的称号であるラデン(Raden)をつけるようになり、さらに晩年には数知れない称号⁷を奉られるようになった。

恭^{うやうや}しい称号は封建社会の遺物のように思うが、今日のインドネシアにおいて軍隊の階級とか学位などの現代風の称号が定着している。特に学位は学歴社会を反映し本人は名刺にも明記して名乗る。フォーマルな呼び掛けは称号を伴わなければならない。当人へ手紙を出す際には称号を落としては失礼になる。ジャワ人は日本人と同様に名刺のやりとりが盛んである。名刺には称号が麗々しく記載されている。

称号には細かなルールがある。学位の例では名前の前の称号はDr(博士)、Ir(Insinyur 工系学士)などである。名前の後の称号は Drs. (Doctorandes) は学士でその後に専門分野が付け加わる。S.H(SarjanaHukum 法律学士)、S.E(SarjanaEkonomi 経済学士)、M.A(文系修士)、M.Sc(理系修士)である。あるだけの称号を勲章のように規則に従って名前の前後に並べる。学位の起源はインドネシアではなくオランダである。オランダの持ち込んだ風習のうちジャワの体質に馴染むものは後生大事に墨守されている。

インドネシアの称号の中の最高位は国王を意味する『スルタン』と『ラジャ』である。ラジャはヒンドゥーにちなむ王の意味であり、スルタンとはアラビア語の統轄者⁸である。スルタンはカリフが授ける称号であったが、イスラム教の布教とともに改宗したそれまでの王はスルタンをも併せて名乗るようになった。

インドネシアのスルタンはジャワと外島(→019)では格が異なる。ジャワのスルタンはマタラム王朝の正当な後継者の称号であり、王家が分裂した際にスルタンの称号はジョグジャカルタ家(→252)が引き継いだ。ちなみにスラカルタ家はスフナン(→131)の称号である。両者は同格ということであるが、スフナンの方が格は高いらしい。

⁷ スカルノ大統領は生前に政治的スローガンの伴う数多くの称号を有したが、最後の墓碑に刻まれた称号は学位だけのシンプルなものである。

⁸ イスラム教の最高権威者はカリフという。マホメットの後継者のカリフが統治者にスルタンの称号を与える。カリフは日本の武家支配時代の天皇であり、スルタンが将軍という関係になぞらえられる。

スルタンの称号の授与の元締めはマホメットの後継者であるカリフである。初めは貴重であった称号も 19 世紀頃はオスマン帝国に貢物する程度で簡単に名乗れるようになった。スマトラ島、カリマンタン島など外島ではスルタンが乱立⁹された。

植民地政庁はスルタンを擁立し持ち上げて外島支配を拡大した。既存の政治権力を利用するというオランダの植民地統治政策の一環であった。しかし植民地政策に歯向かうスルタンは容赦なく廃絶された。

638. ジャワ人の家族関係

年上の男性への呼び掛けは父の意味の「バパ (bapak/pak)」である。年上の女性には母の意味の「イブ (ibu)」であるように親族名称が代用されている。家族関係と社会関係が混乱しているというよりは、むしろ故意にダブらせているのであろう。

ちなみに夫から妻への呼び掛けは「Adik/dik (妹の意味)」であり、妻から夫への呼び掛けは「Abang/bang (兄の意味)」であるように夫が妻より年上が一般的である。母方の従兄妹結婚は他のインドネシア人にもあるが、弟・姉の関係の従兄妹結婚はタブーらしい。

双系社会であるジャワ人の家族関係の基盤は夫婦関係である。建前は夫の方が主たる稼ぎ手であり、対外的には夫が代表することになっている。しかし経済的に実権を握っているのはどうやら妻側である。

ジャワ人の家族が外見的には核家族のように見えてもそこには夫婦とその子供以外の者、例えば兄弟姉妹の夫婦とかその子供などが同居していることが多い。富裕な家族ほど大きな枠組みの提供が可能になる。

ジャワ人の家族関係は西欧の家族社会学の枠組みでは処理しえない。西欧の排他的家族に対してジャワでは家族と親族の区別が厳密でない。自分の子供も兄弟姉妹の子供も全部プールして分け隔てなく育てられている。

子供の上下は年齢で区別される。「集うておれば食足らずとも苦しからず」というジャワの諺は社会のみならず大家族が受容されるゆえんである。

家という概念がないから遺産相続もジャワ古来のアダット(→588)による男女差別のない均等配分と男性優先のイスラム法が適宜ミックスされている。年老いた親の介護もケースバイケースで一般的なルールはない。

家族関係の規範が弱くルーズであるのはジャワ社会のみならずインドネシア社会ひいてはオーストロネシア系(→563)民族共通の現象である。ジャワ人を含めてインドネシア人と結婚する日本人は男女を問わず多く、日本社会の国際化でこれからも増えるだろう。日本人とインドネシア人との国際結婚もしばしば破局に直面するが、最大の原因は本人同士の問題より家族関係である。

戦後の新民法の浸透により日本人の意識では夫婦と子供だけが家族である。それ以外は親類であり、親類のつきあいも3親等、4親等程度どまりである。

インドネシア人と結婚した日本人には連れ合いのわけの分からない人が親類と言ってもたれかかってくるのが耐えられない。先方は日本人の家庭は裕福だから親類の面倒を見るのは当然のことと思っている。

インドネシアの会社組織における上下関係は家族関係に準えられる。子供が父親を敬うがごとく部下は上司に接しなければならない。その代わり父親が子供に対するがごとく上司は部下に対応することが期待され

⁹ インドネシアに隣接するマレー半島では9の領域に9人のスルタンがいた。マレーシアとして独立国になる際に立憲君主制を採用し、9人のスルタンが持ち回りで国王になっている。

る。家族的経営、年功序列、終身雇用という日本の会社文化を最も受けやすい民族であろう。

639. ジャワ人の名前

ジャワ人に限らず双系社会(→568)では家という概念がないので、家名である“姓”はなく名前だけである。ジャワ人の男性の名前にはSで始まりOで終わるものが多い。二人の大統領のスカルノ(Sukarno)、スハルト(Suharto)ともジャワ人である。女性はSで始まりIで終わることが多い。

Sの発音はサンスクリット語で“聖”という意味に通じる。このようなことでインドネシア人の名簿を見るとSの部が非常に多く、全体の 1/3 近くを占める。電話帳は Subroto、Sartono、Sumantono、Soroamijoyo、Suryopranoto、スナルト、スハルジョ、サリモ、ストヨ、ステジョ等々で数センチの厚さになる。その他 Widono、Pusfosufondo などが典型的ジャワ人の名前である。ちなみにジャワ人とそりの合わないバタック人もSで始まる名前が多い。

スハルト政権末期の実力者、スハルト大統領、ハビビ副大統領、ハルトノ調整大臣、ハルモコ DPR 議長の4人をまとめて「Hahahaha」のシンカタン(→964)を流布(声を出して読んでみる)して侮辱罪で起訴された人がある。Ha のつく名前も案外と多そうである。

双系社会のため「姓名」の「姓」はなく、名前だけである。ジャワ人やスンダ人の名前は1~4語からなるが、通常は2~3語が一般的である。その名前の語の中に父親と共通する言葉があるが、これは父親の「茂男」に対して息子が「茂一」というようなもので全部名前である。

スカルノもスハルトもこれで名前の全てである。スカルノ大統領の名前はSにマハーバーラタの勇者のカルナ(→948)にちなむ、このようなインド古典からの引用は中流以上の家庭である。スカルノも大統領職を続けるうちに本人の署名は「S.Karno」と記したらしい。

しかし両大統領とも子供には長い名前をつけた。スカルノの長女メガワティ大統領(→456)のフルネームはDyah Pertama Megawati Setyawati Soekarnoputri である。スハルト大統領の長女は Siti Hardiyanti Hastuti である。長い名前で姓をすりかえようとする気持ちがあるように思う。長い名前の場合は短い通称を名乗る。スハルト大統領の長女の通称はトウトウト(Tutut)である。

貴族や王族は名前が長く Sampeyan Dalem Inggang Sinuwun Kanjeng Sultan Hamengku Buwana Senapatiing Ngalaga Ngabdurrankhman Sayidin Panata Gama Kalifatullahingkang Kaping Sadasaing Nagari Ngayogyakarta Hadiningrat という名前の人がいる。ジョグジャカルタのスルタン・ハムンクブウォノ10世(→445)のフルネーム¹⁰である。落語に「じゅげむ 寿限無、じゅげむ 寿限無……」というのがある。

名前の変更は可能である。結婚して名前が変わるのは女性に多く夫の名前の一部を取り入れる。上流階級に多いことは西欧の影響であろう。男性の場合は不運なことが続くとその打開のため名前を変える。父親の名前を外して簡単にすることが多い。縁起かつぎであるからスラマタン(→705)を催すくらいの負担は必要である。

¹⁰ NHK 編「ジョグジャカルタ」

640. インボリュション

ジャワ人、ジャワ文化、ジャワ社会を表すキーワードの「インボリュション(Involution)」という言葉がある。英語辞書で確かめると Involve の名詞形で「巻き込み、複雑、混乱」の意味に加え、専門用語として[文法]複雑構文、[数学]累乗、[生物]退化、[医学]退縮の意味がある。民族学の用語としては「ある確たる型を形成したにもかかわらず、安定もしなければ新しい型に転換することもなく、むしろその内部でより複雑化することによって展開するような文化型」とある。

アメリカの文化人類学者ギアツ(→978)はジャワ農村のフィールド研究からジャワ社会を評してインボリュションと名づけた。ジャワ農民の社会形態は人口の増加に対してより一層土地に労働力を注ぎ生産をあげる。一見、生産量は増えているようであるが、一人当たりの生産量は低下しており、労働力に見合うだけの収穫は得られていない。

ジャワの農業では全員が乏しきを分かち合うことで対応してきており、ギアツは“貧困の共有化”と名づけた。「インボリュション」と「貧困の共有化」はジャワ社会の特質を表すコンセプトである。

インボリュションはジャワの文化現象にも適応される。文化概念としてのインボリュションとは一見は精細であるが、実は退化であるという意味においてジャワ文化の説明により適している。オランダ支配下でジャワ王室は主権を取り上げられ、政治的に無能力者の存在になった。もともと武人のプリアイは純粋な宮廷貴族となる。することのなくなったジャワ王室と貴族層は文化の細部精密化＝インボリュションにあらん限りの精力をつぎ込み励むことでその存在を顕示した。

ワヤン(→904)、ガムラン(→910)、宮廷舞踊(→912)など洗練されたジャワ文化の細密化をジョグジャとソロの王室が競った。ハルス(上品)を極めるためジャワ語の敬語はますます煩雑で難しくなり、^{ほんぶんじょくれい}繁文縟礼の礼儀作法が発達した。

インボリュション文化現象は日本の江戸時代にも見られる。鎖国により自ら目を閉じた徳川幕府の下で江戸文化はジャワ文化と同じインボリュションの過程をたどった。『忠臣蔵』に見られる江戸城の松の廊下の作法は大名(武士の統領)に歩行が困難になるような衣類を着用させ、刀は装身具となり本来の用途は禁止された。関ヶ原から元禄まで100年未満の間にここまで武士は退化させられた。

日光の東照宮は気宇壮大な文化ではない。江戸時代の武家文化の精神構造は無意味な金銀の散財、^{せいじち}精緻だけを目的とした退化へ向う萎縮した文化である。半世紀以上前に読んだ岩波新書のブルーノ・タウト著『日本美の発見』を思い出した。故宮博物館の清王朝時代の工芸品も同列である。西洋では後期ゴシック様式が該当するらしい。

日本も江戸時代というインボリュションの不幸の時代を経たという意味ではジャワ植民地時代と同じである。日本のインボリュションは徳川家門閥維持のための自作自演であり、ジャワのそれがオランダ支配という外圧であった点で異なる。